

「関東KAIZENフォーラム2012」開催

—意識を変えて 視点を変えて
より良い環境 生みだすKAIZEN—

情報通信エンジニアリング協会 関東支部

はじめに

昨年11月26日、東京都江戸川区のタワーホール船堀において、会員会社はじめ関係者約430名にお集まりいただき、関東KAIZENフォーラム2012を盛大に開催いたしました。

冒頭、石川國雄関東SKY運動推進本部長より開会挨拶がありました。

「本フォーラムは、今回で26回を数えることになり、皆様の日頃からの安全・業務の改善に関する熱心な取組みの賜物と感謝を申し上げる次第です。

最近では発表のテーマも内容の幅が広がり、業務のやり方やプロセスの見直しによって業務の効率化と生産性向上を図るという内容となってきました。

さて、昨今、東日本大震災の復旧活動に取り組むと同時に各方面での対策の必要性からBCPの検討が盛んに行われました。通建業界でも有事の際の連携体制はもとより、衛星携帯電話など非常時の通信手段の確保、物品の手配、移動のための燃料確保や活動の場所・拠点の確保など、さまざまな観点で検討が進められました。

こうした検討においても現場の力と知恵をいかに結集させるかが重要になり、そこには、これを支える改善の目・心・力が必要不可欠でした。

私たち通建会社がかつとも優先すべき安全についても同様です。一生

懸命注意をし、研修を受けスキルを高めてチェックをし続けても、1つ間違えば残念ながら事故につながるケースがいまだに発生しています。

こうしたことを変えていくためにも日頃から現場の力と知恵を結集させ、現場力向上につなげようという1人ひとりの改善の目・心・力が重要ではなからうかと思えます。

本日は震災の復旧活動から生まれた作業効率の改善、あるいは設備事故や特別の取組みから生まれたKAIZENをはじめ、日常の業務を少しでも、改善していこうというマインドから生まれた発表を予定しています。

1つひとつの改善が大きな成果を生み出し、それが現場力の結集と向上につながるということを実感しつつ、さらにはそうした改善作業が定着し、すべての会員会社のフィールドにおいて成果が水平展開されるよう、取り組んでいただくことをお願い

いたします。」(写真1)

成果発表

西口忠司氏(日本コムシス)、岩崎朋子氏(ミライト・テクノロジー)の司会(写真2)により、会員各社の予選で選ばれた代表7サークルによる成果発表、優良事例発表および協賛発表を含むNTT東日本・西日本社長表彰(VE&VA)案件2サークルの発表が行われました(表1・写真3)。サービス総合工事エリアの再編改善から新製品の開発まで幅広いテーマで発表が行われ、会場からは熱心な質問が寄せられていました。

発表に続き、最優秀標語の唱和が行われました。KAIZENスローガンは日本コムシスの寺坂真臣氏より「意識を変えて 視点を変えて より良い環境 生みだすKAIZEN」を、安全標語は協和エクシオの名取基幸氏より「危ないと気付いた人が責任者、止める勇気で0災害」を、それぞれの音頭により、参加者全員で唱和しました(写真4・表2)。



写真1 石川本部長挨拶



写真2 発表司会



つうけん



和興エンジニアリング



池野通建



ミライト・テクノロジーズ



ミライト



協和エクシオ



日本コムシス



優良事例発表 日本コムシス



協賛発表 タカコム

写真3 幅広いテーマでの成果発表



写真4 標語の唱和

表2 標語入選作品

大会スローガン

応募作品	結果	会社	氏名
意識を変えて 視点を変えて より良い環境 生みだすKAIZEN	最優秀	日本コムシス(株)	寺坂 真臣
毎日の慣れた作業を 見直す意識 新たな目線で KAIZEN活動	入選	(株)ミライト・テクノロジーズ	望月 隆
改善は ひとりひとりの疑問から 小さなつぼみが 大きな成果!!	入選	(株)ミライト・テクノロジーズ	伏見 修司
小さな改善 大きな成果 みんなの工夫で KAIZEN職場	入選	(株)協和エクシオ	堀 菜月

安全標語

応募作品	結果	会社	氏名
危ないと気付いた人が責任者、止める勇気で0災害	最優秀	(株)協和エクシオ	名取 基幸
変わる環境 変わらぬ基本 ルールを守って 安全作業	入選	日本コムシス(株)	布施 崇
自己判断は赤信号、相談しないは黄色信号、ハウレンソウで青信号	入選	池野通建(株)	柴田 明雄
安全は守る勇気と続ける努力 鉄則守って 安全作業	入選	(株)協和エクシオ	山田 雄大

特別講演

ロンドンオリンピック日本代表選手団総監督 塚原 光男 先生から、「限りなき挑戦」と題し、特別講演をいただきました(写真5・6)。

塚原先生は1968年のメキシコ大会から1976年のモントリオール大会までオリンピック3大会で男子体操の団体および個人で金メダルを獲得したほか、「ツカハラとび」や「月面宙返り」を考案、発表するなど、体操競技における先駆者としてご活躍されました。

今講演では、ロンドンオリンピックで躍進した日本選手の取り組みや、ご自身も出場したモントリオールオリンピックのエピソードを交えて、優れた結果を出すためのチーム力やためまぬ努力の必要性についてお話

いただきました。

1. チームジャパンで勝ち取ったメダル

2012年夏に開催されたロンドンオリンピックで総監督を努めてまいりました。皆さん方の盛大な応援をいただき、史上初38個のメダル獲得という大変な成果をあげることができました。心から感謝します。

また今回は団体競技でメダルを取ることが大変多かった大会です。例えば卓球は個人では駄目でしたが、女子団体では最後の決勝で3人が粘りに粘って取った銀メダル、それからバドミントンも女子団体で銀メダル、フェンシングも太田選手は個人では駄目でしたが男子団体では準決勝の最後1秒で逆転、決勝に進出し銀メダルを獲得、水泳でも男子の北島選手は個人で自己新は出せません

でしたが400mメドレーリレーでは見事、自己新を出し日本の銀メダルを導きました。女子バレーも準々決勝の中国戦でデュースを重ねて粘り勝ちし3位の銅メダル、そしてサッカーなどでこの銀メダル、アーチェリー団体で銅メダルを獲得するなど「団体競技で勝てる日本」を印象付けてくれました。

個人競技では自己新が出せないのになぜ団体競技の時に自己新を出せたのか。北京オリンピック終了後の4年間は『チームジャパン1つになって戦おう』というスローガンのもとに努力しました。さらにチームが一丸となるきっかけを作ったのが2011年3月11日の東日本大震災でした。我々は今回、「被災者の方に元気と勇気・感動と笑顔を送ろう」というもう1つのスローガンも作りました。

チーム一丸となって、いまの疲弊した日本にスポーツの力で元気と笑顔、オリンピックでメダルを1つでも多く取ることでこれを国民に伝えようという思いが、今回の選手のエネルギー、パワーの源になったのではなかろうかと感じるわけです。

2. 環境を整えること

これまでは競技別に短期・中期・



写真5 塚原先生特別講演



写真6 モントリオールオリンピック金メダル

長期のプランを立ててきました。しかし、日本オリンピック協会(JOC)は今回、24競技の団体に対し戦略や目標を立てさせ、それに換算した強化費を出しました。また年に3回、各団体にJOCに来ていただき、もっとこうした方が良いといった要望を聞き、調整も行いました。

さらに前回の北京オリンピックの6カ月前には合宿、フィジカル、ドクター、トレーナーを兼ね備えた施設『ナショナルトレーニングセンター』を設立しました。今回のロンドンオリンピックで初めてメダルを獲得した6種目全ての競技がこの施設で訓練を積んで勝ち取ったものです。やはりスポーツ環境を整えるということがいかに大事か、こういうことも証明された大会になりました。

3. 好きだから努力できる

オリンピックは大変なプレッシャーがかかります。私もモントリオールオリンピックの代表選手に選ばれたことを思い出しました。

当時、体操男子団体で5連覇を目指す日本は金メダルを取って当たり前といわれていました。しかし大会

3日前にエースであった笠松選手が盲腸で欠場するなどにより、通常は6名が出場し、そのうち上位5名の点数が反映されるのですが、出場できる日本選手は5名のみ。1つの失敗も許されない状況で、日本選手は完璧な演技を行い、最後の鉄棒を残すのみとなりました。鉄棒競技では4名の選手が完璧の演技をし、残りは私だけとなりました。私には尋常ではないプレッシャーがかかりました。そんな時ふと、(これがお前なんだ、人間なんてこんなもんだ)という究極の開き直りが生まれました。これによりすっきりとした気持ちで鉄棒に飛びつくことができたのです。

そして演技を開始。最後のフィニッシュは月面宙返り、空中高く上がって、パーンと着地へ…。(やった!足から降りてる!!)普段ならこういうときは(やった!!)と手が上がりますが、この時はただ一言、(助かった)という気持ちでした。

オリンピックはこんな世界です。ですから金メダルを取った選手は「自分の力で金メダルを取りました」なんて言いません。皆さん「みんな

の力で、誰かの力で支えられてメダルを取ることができました。」と言います。それはぎりぎりの勝負をしているからです。

「才能がないと金メダルは取れないのか?」とよく聞かれますが、才能がないと金メダルは無理です。しかし才能というのは結果でしかありません。その結果を出すために努力できる人、これが才能だと思います。それではどうして努力できるのか。それはその世界が好きだからです。だからどんなことも努力できる。そういった世界を魅力的に選手に伝えられるか、どう好きにさせるか、それがコーチングの大きな仕事です。皆さんにおかれましても仕事の、あるいは人生においての金メダルを勝ち取っていただければと思います。

表彰式

特別講演に続き、発表9サークル、標語入選者(最優秀2名)に対し、石川 國雄 関東SKY運動推進本部長から感謝状・副賞の贈呈が行われ、会場は大きな拍手に包まれました(写真7・8)。



写真7 表彰式



写真8 発表者記念撮影

おわりに

最後に、情報通信エンジニアリング協会 佐久田 専務理事より、「今回の発表は業務改善的なもの、安全に関すること、技術改良等ということで、多岐にわたる分野でそれぞれレベルの高い発表が行われました。我々が日頃から取り組んでいることがバランスよく展開されていると感じたところです。

本日は感謝状を授与させていただきましたが、とうてい順位をつける

というものではないと思っています。

KAIZEN活動自体が止まることはありません。広く水平展開し知恵を真似し、さらに大きくなっていくことに意味があると思っています。協会活動においても、そういう施策について展開していくことを考えていきたいと思っています。今後も引き続きKAIZEN活動にしっかり取り組むとともに、安全にはくれぐれも気をつけて進めていただくことを切にお願いしたいと思いますので



写真9 佐久田専務理事閉会挨拶

宜しく願いいたします。」と閉会挨拶（写真9）があり、関東KAIZENフォーラム2012は盛会のうちに終了しました。